

批評と紹介

敦煌變文研究の動向 (一)

資料研究を中心に

金岡照光

敦煌出土俗文学資料の中で、變文はもつとも学界の注目をあつめ、各種の角度から検討されて来た重要な資料である。しかしながら、變文の研究はさかんであるといつても、その細部の考証はさておき、基本的な諸問題さえ、なお解決されていない点があり、今後の開拓に俟つものが多い。入矢義高教授は、資料の整理、覆刻が不十分であること、体例、演出方法、成立過程、展開方法等についての分析、綜合、歴史的迹づけが不十分であること、更には變文の語義の不明確なこと、延いてはそのカテゴリーの定め方についても定説がないこと等を挙げて、變文研究の現在の水準が満足出来ないものであることを力説されている。(入矢義高「書評・敦煌變文彙録」中国文学報第五冊・一二二頁)資料の覆刻については、その後中国において、或る程度満足すべき成果が公刊されたが、なお十全のものとは称し難いし、その他の諸問題については不毛の地として残されているものが多いのである。そこで今後の研究の進展をはかり、

その水準をたかめていくために、變文研究の現在までの到達点をさぐり、問題の所在を聊かなりとも明確にしておきたいと思う。紙数の関係もあり、四十数年の研究過程を細大洩らず記述することは許されないもので、二、三の重点的な問題にしばつて、現在の時点における課題を検討して見たい。個々の研究文献は別にビブリオグラフィを発表したいと思つていたので、それにゆずりたい。

最初に資料の覆刻、校勘の作業が現在までにどのように發展して来たかを眺めて見よう。變文の研究が、すでにその初期の紹介から四十数年を閲しているにもかかわらず、その根本資料の覆刻、校勘が十分に行なわれていないのは一見奇異な印象を与えるかもしれない。しかしながらこの面での基礎作業がきわめて遅れていたことには、一つには原写本がロンドン、パリ、北京に集中し、その全面的な公開がなされなかつたため、資料の蒐集、校合にいちじるしい障害があつたこと。(ここ数十年來この問題はかなり解決された。)一つには原写本が謄字、俗字、仮借字に満ち、多くの脱漏、欠損があり、その上に覆刻諸本の臆改が重なつて、その校勘が困難をきわめたこと、一つにはこうした唐代の俗語、俗文体の正確な語学的な処理法がまだ確立されておらず、解説は全くの模索により、多くの断片的用例の積み重ねを以てしなければならなかつたこと等が、その理由として挙げられる。このようにして基礎的な資料研究が不完全な儘に、變文の文学史的な位置づけや、その実態機能についての仮

説が多く立てられたのであるから、その定義、範疇は漠然たるアウトラインは設定し得ても、詳細な裏付けを欠く不安定なものとなつてしまつたことは避けられなかつた。一九二〇年代より三〇年代にかけて、中国においては「敦煌零拾」(一九二四・羅振玉・上虞羅氏鉛印本)「沙州文録」(一九二四・羅福萇・上虞羅氏鉛印本)「敦煌掇瑣」(一九二五・劉復・國立中央研究院歷史語言研究所刊本)「敦煌叢抄」(一九三一・三二・向達・國立北平圖書館刊・五卷六号・六卷二号・六卷六号)「貞松堂西陲秘籍叢殘」(一九三三・羅振玉・上虞羅氏珂瑯版鉛印本)「世界文庫」第九・第十・第十一・第十二冊(一九三六・鄭振鐸・上海生活書店鉛印本)「敦煌石室寫經題記与敦煌雜錄」(一九三七・許國霖・商務印書館排印本)等の覆刻諸本が相ついで刊行された。

本邦においても、羽田亨博士とペリオ氏の共編による「敦煌遺書活字本第一集」(一九二六・上海東亞致究会)が刊行されて後、岡崎、狩野、石浜、神田等諸先学の手により、あるいは手抄され、あるいは影印された原写本が個別的に將來されたが、まとまつたものとしては、「大正新修大藏經第八五卷古逸部」(一九三二)「鳴沙余韻」(一九三三)等がある。この両者に採録されたものはほとんど一致しており、ともにロンドン本の仏典關係(主として押座文)を中心としている。これらの戦前の覆刻諸本は、その校勘の精疏、採録写本の多寡等からそれぞれ異なる価値をもつが、原写本に接する機会を持たなかつた戦前の本邦研究者にとつて、唯一の資料的な根拠であり、その意味で、その後の研究によきにつけ、あしきにつけ大

な影響をもたらしたのである。その個々の問題につき、こゝで指摘することは紙数の關係もあり省略しなければならないが、全体を共通していることは、次の諸点である。

(1) 写本の分類・名称等の基準が一定していないこと。
(2) 覆刻に際しての校勘がほとんどなされておらず、加えてかなり多くの誤写、臆改が見られること。

(1) について一つの例を挙げれば、「敦煌零拾」がその第四に「仏曲三種」と銘打つて、「降魔變文」「有相夫人變文」(真題は「歡喜國王緣」)「維摩詰經變文」を収録しているが、同書第五には「偈曲三種」として「歎五更」「天下伝孝十二時」「禪門十二時」等を収めている。第四所収の如き説唱体の文章を、第五所収の如き、一句三・七・七・七、もしくは三・五・五・五字より成り、一首四句三韻を押する所謂定格聯章の類と同じに「曲」の名を以て呼ぶことの基準は全く不明である。又第三所収の三つの「變文」についても、少くとも「維摩詰經變文」は經、白、唱の三段形式をとる異類の文体である。(即ち所謂「講經文」)これらをとともに變文の名を以て統一した所に、後々の研究において變文、講經文の差を混同せしめる萌芽があつたように思われる。

(2) については枚挙に遑がない。まづ第一に句読や校註はほとんどどこされておらず、解読の段階に程遠かつたことを示しているが、覆刻者自身のミスと思われるものもかなりある。同じく「零拾」四の「有相夫人變文」から、一、二の例をあげれば「帰土」を「帰七」に、「有相」を「有於」に、「愛怜(憐)」を「愛恰」に「寿百千年」

を「受百千年」にしたもの等は、覆刻者の明らかなミス、もしくは不注意と思われる。このような例は前掲数種の覆刻本のあらゆる箇処に頻出し、原典との照合の不徹底、校勘、解読の不十分なることを露呈している。こうしたことは現在ではすでに十分認識されているが、たゞ過去の研究においては、このような不十分な覆刻本によつて行なわれた研究が大部分であり、その研究が現在に至るまで尾をひいていることを、あらためて認識しなければならぬ。勿論こうした不十分なるテキストによりながらも、戦前における変文研究は、そのアウトラインをかなり詳細に提出しており、その水準は決して全面的に否定すべきものではない。たゞ、覆刻校勘の不備による研究上のミスが出ていることも考慮しなければならない。たとえば青木正児博士が「孝子董永伝」は「伝」と銘打たれている其名によつて此を考うれば、伝は散文体なるが普通であるから、或いは此篇は韻文、散文を併用すること、猶ほ「目連縁起」等と同様の体のものではなかつたのであろうか。」（敦煌遺書「目連縁起」）大目乾連冥間救母変文「及び」降魔押座文「に就て」支那学四ノ三、一二八頁）と述べておられるが如きは、恐らく狩野直喜博士の命名とおもわれる「孝子董永伝」なる擬題を、真題と考えられたためにおこつたミスで、当時においてはやむを得ざる制約であつたとしても、同様擬題、真題の区別を明確にせざる資料校勘がかなりあるため、戒心を要することとして再認識しておく必要がある。

このような原写本そのものの校勘、覆刻、解読の立ちおくれ、それに基礎をおく変文研究上の制約、障害を克服する形で戦後の研究

は出発している。即ち原写本の校勘と覆刻を第一の任務としての成果が次々と公刊された。

勿論それにはロンドン、パリ所蔵の写本がマイクロフィルム普及とともに、戦前においては予想も出来なかつた正確さと速さをもつて、全世界に流通しはじめたことも、大きな要因となつてゐる。端的にいえば一九五七年三月の王重民氏等六氏の共編による「敦煌変文集」上・下二冊（人民文学社）の刊行は、変文研究に一新紀元を劃すものであつた。これを契機として従来の暗中模索の変文研究は、信頼すべき覆刻本を与えられ、断片から綜合へと大きく組織的、体系的に進展していつたのである。もつともこの前後にかなり多くの敦煌文学に関する覆刻が刊行され、「敦煌曲子詞集」（王重民、一九五〇年一月初版、一九五四年十二月再版、商務印書館）「敦煌変文集録」（周紹良、一九五四年十二月初版、一九五五年八月増訂改版、上海出版公司）「敦煌曲校録」（任二北、一九五五年五月刊、上海圖書發行公司）等が相次いで世に問われた。この中、変文に直接関係のあるものは「敦煌変文集録」である。これは変文をまとめて覆刻した最初の活字本であつたが、その内容は極めて粗雑で學術的な利用に堪え得るものではなかつた。（本書についての詳細な批判は入矢義高教授の書評「中国文学報」第五冊につくされている。）それに対して「敦煌変文集」は王重民、王慶菽、向達、周一良、啓功、曾毅公六氏の共同討議にもつき三ヶ年の歳月を経て公刊されたもので、その校勘、復元の水準は従来にくらべて格段に充実したものである。

本書のすぐれている点は(1)原写本もしくはそのフォトコピーに直接あたることを原則とし、従来刊行の覆刻本は間接的参考資料にとどめていること。(2)各写本ともすべて同系写本を数種、多きは十数種入手出来る限り校合し、ほど完全な形に復元していること。(3)校勘の手続きはすべて校注及び統一された符号で明瞭に示されていること。(4)臆断、誤写を避け、原典の譌字、俗字その他不明瞭な部分は、すべて注記に統一して示されていること。(5)俗語、俗文体に満ちた唐五代の此の種のヴァルガスな資料を語学的にかなり消化しており、句読その他における解説上のあやまりがきわめて減少していること。(6)真題、擬題を明確にしていること。等があげられる。その後の中国、ヨーロッパ、日本における研究の大部分が本書を底本としていることから見て、その学術上の信用度を推測出来る。勿論本書に対してもいくつかの疑問がないわけではない。今その一、二の例を挙げて今後の問題発展への手がかりとしてみたい。第一に本書の採録基準、換言すれば変文の定義、範疇に対する所説への疑問である。向達氏は本書の引言において左の如く述べている。

「唐代寺院において流行した説唱体の作品は、俗講の話本に他ならない。変文云々は、たゞ話本の一つの名称にすぎない。」

〔敦煌変文集〕上・引言 三頁

これは従来しばしば説かれて来た変文のアウトラインを、そのまゝ、変文のカテゴリーとして肯定し、その枠をかなり拡大解釈したことになる。即ち変文とは俗講話本の別称であり、俗講という実用目的上の共通点と、説唱体という様式上の共通点を併せ有するものはす

べて変文という枠内に入れることが出来ることになる。従つて本書に収録された資料はその範囲が相当ひろげられており、入矢教授が「これは題名は『変文集』であるが、内容的には敦煌写本に存する俗文学資料の集成である。」(『蔣礼鴻「敦煌变文字義通釈」書評、中国文学報第十一冊、一七五頁)と述べられたのはこの点であり、一面においては本書が資料集として豊富な材料を収録していることにもなるが、一方では変文というジャンルをきわめてわかり難い無制限なものにしてしまったことは、甚だ遺憾であつた。向氏は「変文は俗講話本の名称」と断じているが、なお左の如き疑問がのこる。

(1)所謂「講經文」「押座文」等と「変文」との関係は如何か。

(2)「講經文」「押座文」「変文」はすべて同じ性格の俗講の話本なのか。そのそれぞれの機能はどうことなるのか。

(3)「変相」なる絵画との関係は如何か。

(4)こゝに収録されたものをすべて説唱体と呼ぶことが妥当か如何か。

こうした問題について向氏や他の諸氏の新しい研究成果が明らかにされなかつたのは、この変文集の見事な校勘と比較して、きわめて残念であつた。本集に収められたものの中には、その意味で果して変文集に入れるのが妥当か否か疑わしいものが、かなりある。たとえば「董永変文」の如きも、これを変文とする基準について明らかにしてもらいたかつたし、「韓朋賦」「孔子項託相問書」「晏子賦」「茶酒論」「搜神記」等々は、それぞれ俗講話本としての基本条件を明確にして貰いたかつた。第二には本書の校訂についても、なお

いくつかのミスが発見されるということである。その詳細な例を挙げることは別の機会にゆずるが、今気がついた例のみをいくつか挙げて見よう。第一には原写本において誤写されていない字を、変文集でわざわざ誤字にあらためた例もかなりあるし、又疑問な点も少ない。「旧日形容改変」(七〇六頁)の「旧日」は原典では「旧白」となっているの、むしろ「旧良(貌)」とした方がよいのではないか。「衆僧解憂之日」(七〇八頁)は「解憂(夏)」と校勘すべきだし、「羅漢九旬告必之辰」(七〇八頁)は「告必(心)」とすべきである。又「多饒殺害」(七〇一頁)は原典で「多饒煞害」となっているのだから改訂の要なく、「我嬌兒」(七一〇頁)の如きは、原典が「我嬌兒」となっているのを、わざわざ改悪した例である。こうした細かいミスは本書の各処に散見する。その誤った例について、口語々集に関する面は、入矢教授の「敦煌変文集口語々集索引」(一九六一・油印)に指摘されている。口語々集以外のミスについで、かなりの例があるが、こゝではパリ本「目連縁起」に関する数例をあげるにとめておく。いずれにせよ、本書のすぐれた成果を否定するものではないが、現段階においては、なお原写本のフォトリコピーとの厳密な対照、校合が必要であり、その意味でも、大英博物館のスタイン文書の全写真版が一九五七年東洋文庫にもたらされた如く、ビブリオテク・ナショナル及び北京図書館所蔵の写本のマイクロフィルムを一日も速かに公開される必要を感じる。前記スタイン文書の公開は本邦敦煌研究において、最も重要な壮挙であったが、変文の資料研究も、「変文集」の上にこうした原典公開の成

果を書き加えていくこと、更には変文フォトリコピーの収録公開をプラスしていくことが、今後の一つの課題となるであろう。

三

「敦煌変文集」の公刊に伴い、変文解読の作業はいちじるしく進展した。その成果を示すものとしては、中国においては「敦煌変文字義通釈」(蔣礼鴻、一九五九年初版、同年増版改訂、一九六二年三版、中華書局)、日本においては「敦煌変文集口語々集索引」(入矢義高、一九六一年・油印)ヨーロッパにおいては、P. Deméville: *La Nouvelle Marie Acariâtre*. (齋新婦文) (Asia Major, A. Waley Anniversary Volume 1959) Chen Tsu-lung 陳 詐竜: *Notes on Wang Fu's Chia chiu Lun* (王敷: 茶酒論) (Sinologica VI-4, 1961) A. Waley: *Ballads and Stories from Tun-huang* (George Allen & Unwin, 1960, London) 等が公刊された。これらはすべて「敦煌変文集」を直接のテキストとしており、その上にたつて変文の翻訳や、解読のための語学的基礎作業を行ったものである。「敦煌変文字義通釈」は二百六十近くの項目にわけ、変文中の難解字の摘読をこゝろみためたもので、変文解読の上にきわめて大きな意義を有する。従来テキストの不備のため試みられることのなかつた変文の解読に一歩ふみ入れたものとして、重要な成果といえよう。勿論本書の内容については尚いくつかの疑問や不備もあるが、本書によって、変文の語学的な処理が、識者の手で大きくとりあげられるようになったのは喜ぶべきことであ

つた。「読増訂本『敦煌変文字義通釈』」(王貞珉・一九六一・文学遺産八輯)は、本書についての解釈上の疑義を提出するとともに、蔣氏が「待質録」として七十余字の解説不能語を提出したのに対し、そのいくつかに試訳を行っている。本邦においても入矢教授が「中国文学報」第十一冊(一九五九)の「書評」でその業績を高く評価しつつも、解釈上の疑義や、その語学的処理の方法等について問題を提起し、波多野太郎教授も「敦煌変文字義通釈読後」(一九六〇、横浜市立大学論叢第十一巻二号)において、その不備を指摘されている。

入矢教授の「索引」は油印によるものであるが、変文集中の口語々集を注音記号の配列により整理統合したものであり、変文解説上きわめて大きな手引となるものであるとともに、唐五代のヴァルガスな言語の体系化にも、一試石を投ずるものである。今後本書にさらに訳読を附し、頁数で洩れている箇所を補い改めて公刊されれば、更に裨益する所大であろう。こうした業績を基礎として今后口語々集以外の難解語や特殊な表現形式を整理することに、大きな期待をかけた。ヨーロッパにおける訳業はウエレー教授のそれだが、もつとも尨大なものである。ドミエヴィル教授、陳祚竜氏の訳は、変文集刊行以前に公刊された M. Soyumié: 'J'Entrevue de Confucius et de Hsiang T'ao' (孔子項託相問書) (Journal Asiatique CCXLI:3-4, 1956) 等とともに、きわめて良心的な訳業であるが、変文と呼ぶには聊か問題のある資料で、むしろその周辺にある俗文学であろう。ウエレー氏のそれは二十四篇(その中

句道興の「搜神記」から六篇)であるが、この中今迄に判明した範囲で変文本来の資料とされていたものは、九篇乃至十篇である。(伍子胥変文・舜子変・孟姜女・太子成道変文・太子成道経・難陀出家縁起・破魔変文・大目乾連冥間救母変文・及び劉家太子伝・更に問題はあるが董永変文)これらはその大半が部分訳、あるいは意識を含むことにも問題があるし、誤訳や、原典との照合の不備も多いが、変文のまとまった訳業としては最初のもので、今後の斯学の発展に大きな足がかりを据えたことに對して、高い評価を与えなければならぬ。本書に對しても多くの批判や検討が加えられた。D. C. Twitchett: Rev. Arthur Waley (tr) 'Ballads and Stories from Tun-huang' (BSOS Vol. XXIV—Part 2, 1961) や、入矢教授の「中国文学報」第十六冊(一九六二)の「書評」等がそれである。ウエレー氏の訳業はその欠陥をさしひいても、なお重要な価値をもつものではあるが、現在の段階では、格調ある名訳、あるいは物語りとして読みやすい訳よりも、語学的に嚴密な逐語訳と、豊富なグロッサリーが提出されることが望ましいのではあるまいか。勿論ウエレー氏の訳が全体として良心的なものであることに異論はないが、個々の変文について不明の箇所を明瞭に示した、言語学的にミスのない報告が、変文の完訳の前の段階として必要なのではないか。カールグレン氏が詩経研究で「The Book of Odes, Kuo-feng and Shao-ya」(BMFE A 16, 1944)において示した如き「文字的翻訳」が変文の世界においても提出され、その後の「文学的翻訳」への基礎となることが先ず要求されることと思う。

現在の変文の資料研究は、テキスト・クリティックの進展とともに、このようにして本格的な解読の段階へ入つて来たようである。元來この種の研究の上に立つての変文の形式、内容、機能、展開等についての考証がなされなければならないのであるが、各種の制約のため、きわめて遅れて、現在なおその緒についたばかりである。今後はこうした着実な研究が、各方面での変文研究を基礎の固いものとして行くに相異ない。それにしても既にしばしば述べた如く、変文の範疇を何処までとするかは、なお未解決の大問題として残されている。勿論これも正確な訳読の進展とともに、次第に解決されていくことではあるが、現在の段階でも、なおこれらの資料を形態的に数種に分別しておく作業は必要と思う。

従来刊行された変文目録にしても、この間の操作は徹底していない。それは「敦煌変文集」の採録に示された如く、きわめて広範な敦煌俗文学の目録か、あるいはその一部の記録が大半であるが、少くとも現在の時点においても、形態的に分別出来る面はある。その点従来の分類はむしろ仏教的、非仏教的という素材論上の分類が多い。中国における「敦煌所出俗講文学作品目録」(向達、一九四三・文史哲雜誌三卷・九・十期)「変文目」(関徳棟、一九四八・俗文学第六十四期)―未見―「変文及唱經文目録」(向達、一九三四・燕京学报十六期)「敦煌所出変文現存目録」(周紹良、敦煌変文集録・一九五五)「敦煌変文目録及孔子項託相問書之伝承」(朱介凡、大陸雜誌二十二卷七期)等の変文に関する目録のみをとりあげても(他の敦煌資料の全般的な目録に含まれた文学目録は別としても)、

その採録テキストの多少にかゝらず、形態上の分類は殆どなされていない。本邦における変文目録はきわめて少く、現在までに公刊されたものとしては、太田辰夫教授の「敦煌文学研究書目」(一九五四・神戸外大論叢五卷二号)がまとめたものとしては殆ど唯一の成果であるが、やはり仏教的、非仏教的という素材論の観点によるものである。勿論かゝる分類も必要ではあるが、今後はその面に更に形態的な分類をも併せ行うべき段階に來ているのではないかと思われる。変文の機能や実態は尚今后に開拓を俟たなければならぬ面が多いことはすでに述べた通りであるが、少くとも形態的に分別し得るものは分別しておくことが、変文の範疇を明確にしている従来の研究を、少しでも焦点をはつきりさせるのに役立つことであろう。先ず第一に「講經文」と「変文」を区別してかゝらなければならない。少くとも「講經文」は所謂「俗講」の基本的な形を残すもので、変文という形態の基礎を示すものではないかと思われるが、文体的に見ても、変文とはかなりの差がある。現存テキストで「講經文」なる原題を残すものはきわめて少く、「長興四年中興殿応聖節講經文」(伯三八〇八)であるが、これは「仁王護国般若波羅蜜多經」を、序分・正宗・流通とわけ、「經」をあげ、「白」で説き「唱」でうたう三段の形式をとるものである。そしてこれと同系の形式をもつ「維摩詰經」関係の説唱体等はこの講經文として別に範疇をたてる。同じ説唱体でも変文の場合は少しくこととなる。「変文」の真題を有する現在までに判明せるテキストは十六種であるが、それらはいずれも「經」をひかず説唱をくりかえすもので、それらは

「且看……処、若為陳說」の類の絵画の存在を推知せしめる慣用句をもつものもあり（「破魔変文」「大目乾連冥間救母変文」等）、又他の慣用句をもつもの（「八相変」の如きもの）、更には「舜子変」「劉家太子変」（尾題）の如き特殊な形態を有するものもある。（これはむしろ散文の枠内に入る。）そしてこれらと同系の題記欠損せるテキストをもふくめ、一応「変文」という大わくの中に入れることが出来よう。（拙稿：「On the word 'Pien' Toyo University Asian Studies No. 1, 1961 参照）勿論この大枠の中における相互の比較も重要であるし、所謂「経変」「俗変」の別も参考に供さなければならぬ。しかしながら、同じ説唱体でも「経」に柱があつたとおもわれる講経文と、「変相」に主軸をおいたとおもわれる変文の類は（変文すべてに「変相」があつたか否か、不明のものも少くないが）別途に系列をくむことが出来る。更に全く説唱体をとらざる純粹の散文体のテキスト（韓明賦、唐太宗入冥記等）、全く韻文体のテキスト、即ち捉季布伝文、董永変文等と、下女夫詞の類、更に所謂「敦煌曲子詞」の類、王梵志詩の類、及び「講経文」と密接な関連をもつ「押座文」の類等は明瞭に区別出来るであらう。

このように形態的な区別を明らかにすることは、同じ変文の真題を有しながら、それぞれことなる文体、構成をもつ各テキストを対比検討し、更に「講経文」「散文体」「韻文体」等との関連を明らかにし、変文の範疇をはつきりさせるための基礎作業とならう。これは変文の通論、俗講の考証、個々の変文の内容、機能、分布等に対

する研究を、不安定な仮説の段階から、確実な実証の段階にすゝめるための第一歩となるであらう。その点で、資料の校勘、解読とともに、こうした文体的、構造的基礎研究の拡大と徹底が、大きな課題となる。しかしながらこうした変文の定義論や範疇論、更にその内容、機能に関する面でも、多くの先学たちが、過去においても、現在においても、それぞれの時点で有益な成果をあげ、重要な仮説や、細部の考証を行つてゐる。その各国における動向をのべることには次にゆずり、本稿では、もつとも基本的な、資料の覆刻、校勘、解読、分類等についての動向を述べ、一、二の期待と希望を挙げておくにとどめる。

（東洋大学文学部助教授）